

# 教育実習Ⅶ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 牧

亮 太

## 1 はじめに

幼稚園教諭一種免許状を取得しようとする学生を対象とした「教育実習Ⅶ（幼）」は、本学初等教育学科幼児教育コースに所属する学生が初めて保育の現場に触れる授業である。その目的は、幼稚園教育の実際に触れて保育を理解すること、教職への意欲を高めることである。

## 2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
オリエンテーション	4月	・本実習の意義・目的・心構え等を確認する。 ・本実習の流れ、実習①～③の目的、実習の手続き等を確認する。
実習①	4～5月	【事前学修】課題の確認をする。 【実 習】幼児教育の実態を知ることが目的とした観察実習を行う。 【事後学修】幼稚園の1日を確認する。興味をもった事例にタイトルをつけ、整理する。エピソード記述の書き方を学修する。
実習②	5～6月	【事前学修】エピソード記述を読み、他者の視点を知る。目標を設定し、日誌の書き方を学修する。 【実 習】設定した目標を中心とした観察および参加実習を行う。 【事後学修】他者のエピソードをもとに、他者とは異なる視点からの考察を考えてみる。日誌を書く上での要点を整理する。
実習③	6～7月	【事前学修】実習②での気づきをもとに目標を設定する。お礼状の書き方等を確認する。 【実 習】設定した目標を中心とした観察および参加実習を行う。 【事後学修】グループでエピソードを1つ選び、討議を行い、報告会用の資料を作成する。
報告会	7月	・事例をもとにして、実習③での気づきを発表する。質疑応答を通して、気づき・学びを深める。
まとめ	7月	・報告会での学びを確認し、授業全体のふりかえりを行う。

## 3 活動の概要

### （1）各実習の概要

段階的に学びを深めていくために、実習ごとにねらいを設定した。実習①では、幼稚園における幼児の姿を知ること、幼児の様子を観察するなかで生じる思考・感情に自覚的になり記述することの2点、実習②では子どもの気持ちを推測しながら事例を記述すること、事例をもとにグループ討議を行

い、自分たちなりの結論を導くことの2点、実習③では、自分たちが導いた結論を具体的事実や省察に基づきながら他者に論理的に説明することの1点であった。

## (2) 教育実習Ⅶを通して学んだこと

《ふりかえりアンケートの結果より》

ふりかえりにおいて、「子ども」「子どもへの関わり方」「保育環境」に関する理解がどの程度深まったのか、それぞれの理解には何が役に立ったかを尋ねるアンケートを実施した。理解の深まりについては、「5：非常に深まった」～「1：深まらなかった」から当てはまるものを1つ選んでもらい、平均得点を算出した（表1）。役に立った内容については、それぞれの理解に役立ったと思う内容を選択肢の中から全て選んでもらい、選択した学生の割合を算出した（表1）。

表1. ふりかえりアンケートの結果

	理解の深まり	役に立った内容 (%)				
		子どもとの関わり	観察	保育者の指導	日誌	話し合い
子ども	3.94 (4.17)	98.0 (91.7)	96.1 (81.3)	90.2 (79.2)	37.3 (54.2)	54.9 (64.6)
子どもへの関わり方	3.94 (4.17)	96.1 (75.0)	94.1 (89.6)	88.2 (93.8)	35.3 (41.7)	49.0 (52.1)
保育環境	3.75 (4.04)	—	96.1 (97.9)	88.2 (72.9)	60.8 (52.1)	41.2 (50.0)

※（ ）内は昨年度の結果

## 4 成果と課題

今年度の大きな変更点として、幼稚園の1日の流れを理解することを目的の1つとした実習①において、「子どもたちの活動」「子どもたちの様子」「保育者の動き」を時系列にまとめることができるワークシートを作成し、活用したことが挙げられる。学生にとっては観察の観点が絞れるという効果があったことに加え、形式が日誌と類似していることから、実習①で各自がまとめたワークシートをもとに、その後の日誌の書き方指導を行うことができた。従来は、DVDを視聴しながら書き方の指導を行っていたが、実習①の経験をもとに指導が行われたため、学生は実際の実習場面を想定しながら日誌の書き方を学ぶことができた。結果的に、日誌の指導に充てる時間が大幅に削減することができた。

また、各実習後の学修について、クラス単位（各15名前後）のグループワークを中心に行っていたため、発言する学生が偏るという課題があったため、小規模なグループ（3～4名）での話し合いへと変更した。学生たちのグループワークへの参加は促されたが、グループによって活動の進捗に大きな差が生じてしまい、全体でのまとめをすることができず、学修成果の共有化を十分に行うことができなかった。次年度は、グループワークの趣旨をきちんと説明したり、話し合いの時間を設け、設定した時間で区切ったりするなどの改善が必要である。

その他に、報告会の形態が十分に周知できないままの実施となってしまったことが課題となった。本授業での説明が不足していたことに加え、上級生の実習報告会に参加した学生が少なかったことから、「報告会」が具体的にイメージできないままの開催となってしまった。次年度は、実習②の事後学修において、報告会と類似した形式での発表を取り入れたり、他学年の実習報告会に参加することの意義を丁寧に説明したりするなどの改善が必要である。